



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO. 6 R5. 06. 15

文責 学校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

ジェントルであれ -質実剛健・報恩感謝に通底するもの-

どの学校にも校訓・校是があります。本校は「質実剛健・報恩感謝」。シンプルにその学校の方向性がうかがえて興味深いものがあります。

「ヤング・ジェントルマン -知なき勇は卑なり-」。どこの学校の校是だったのでしょうか、あるいはスローガンだったかもしれません。ずっと私の記憶に残っているフレーズです。ジェンダーの議論はさておき、「ジェントル」の響きがかっこいいなあと。

この「ジェントル」について恩師から教わったことが今なお鮮明に記憶に残っています。

「ジェントル」とは「優しい、親切的な、礼儀正しい」という意味がありますが、もともとはラテン語の“**genz**”（ジェンズ：種族）を英語型にしたもの。「種族に属する者、本筋、主流」とかいうのが本来の意味だそうです。ここから「鷹揚」（鷹が空を舞うように何物も恐れず悠然としていること）とか「こせこせしない」とかいう意味が出てきています。



つまり、「よそ者」とか「征服された種族」がとかく持ちやすいひがみとか卑屈さというものがなく「心からのびのびとして、別に威張るわけではなく、品位・品格を備えている」という状態が「ジェントル」ということになります。

関連して「フランク」の意味についても。今では「ざっくばらん、率直、裏表がない」という意味に使われていますが、かつてはライン川流域を中心に成立していた「“フランク王国”に属する」という意味だったとのことです。

そこから派生して「征服民族に備わる鷹揚さ」、「よそ者でない自信」という意味になり、今日ではもっぱら「素直さ、率直さ」という意味で用いられています。

私がここで言いたいのは、「ジェントル」にせよ「フランク」にせよ、根っこの部分では「本流」とか「ホンモノ」とか「自信・矜持（きやうぢ）」がその要素になっているということです。言い換えると「ジェントル」とか「フランク」という状態は、借り物や飾り物では成立しない、内面からの鍛錬が必要であり、決して勇に誇るのではなく、自分自身に頼りうる“深さ”と“広さ”がなくてはなりません。私のように、たえず周りの動きや状況の変化に心揺さぶられるようでは、とても「ジェントル」とか「フランク」にはなれないわけです。

人間の尊厳を人種とか、征服者・被征服者という区別をしないで受け入れるのが今日の常識であることからすると、「ジェントル」とか「フランク」とかいう言葉の語源に感覚的な違和感がないわけではありません。

しかし、「心理的に鷹揚になる」とか、「本当の意味で素直である」というためには、何よりも「内面的な安定」や「揺るぎない自信」が必要だという点はナルホドと感じます。

「鷹揚」を確立するためには、まず人間的な深さを確立しなければならないのです。

「浅い瀬にこそさざ波は立つが、深いところに波は立たない」と言います。「質実剛健・報恩感謝」も同じなのではないでしょうか。内面の充実。外見を着飾ることなく真摯に誠実に内面を磨く。ここに本物の鷹揚さ・本当の素直さが生まれてくるように思います。

歴史の生き証人になった日 ―広島サミットから一か月―



公式 HP <https://www.g7hiroshima.go.jp/>

5月19日から21日までG7（主要7か国）広島サミット2023が開催されました。そこでは各国の首脳が原爆資料館で記帳を行い話題になりました。ほんのひと月前のことです。

アメリカのバイデン氏は現職大統領としてオバマ氏に続く被爆地への訪問。芳名録に「世界から核兵器を最終的にそして永久になくせる日に向けて共に進んでいこう」と記し、広島が地元の岸田文雄首相も「各国首脳とともに『核兵器のない世界』をめざすためにここに集う」と記しました。

サミットの開催中、ウクライナのゼレンスキー大統領も来日し、その報道を目の当たりにした私は歴史的な場面の生き証人となった気がしました。大げさでしょうか。

サミットの成果を軽々に論じることはできませんが、語らなければなかったことになってしまいます。私たちはこうした歴史をきちんと引き受けてこれから生きていく責任があります。今の世界状況とこれまでの歴史状況を俯瞰しながら時代を生きる力を養いたいものです。

さて、まもなく6・23。この日が何の日であるか、賢明な皆さんには分かるでしょう。8・6、8・9、8・15と併せてジブンゴトとして引き受けていく覚悟を持たねばなりません。

梅雨ですね～ ―雨もまた奇なり―

水光 潑灑として 晴れ方に好く
山色 空濛として 雨も亦た奇なり

（水面にはさざ波が起こり、晴れの日の湖はまさに美しい）

（山の景色が雨に煙るのもなかなかのものである）

これは中国北宋の詩人蘇軾（字は東坡）の詩の一節で、もととも西湖という広大な湖の美しさをたたえたものですが、この季節、御船山に纏う水煙を眺めるたびにこの詩を思い出します。口ずさむだけでなんとも心地よい響きがあります。

さて、梅雨真っ盛り。しかし、雨の御船山もなかなか風情があるものです。自然の豊かさを愛でつつ、いよいよ本格化した“授業を中心とした学校生活”に専念しましょう。雨の日はより学問に勤しみ、梅雨晴れ間は外の空気を味わう。なんて素敵じゃないですか。

ところで、蘇東坡と言えば、東坡肉。この中華料理なら知っている人も多いでしょう。いわゆる豚の角煮です。甘辛く煮込んで柔らかでジューシーな肉料理。でもなぜ“蘇軾”の肉なのでしょうね。国語の先生に訊いてみたいものです。（ちなみに私は学生時代、中華料理屋で東坡肉を東波肉と書いてあるのを指摘してタダにしてもらったことがあります！）



ちょっと立ち止まって ―自分を俯瞰してみる訓練を―

最近立て続けに、ちょっとした怪我や事故、地域からの苦情といったものが起こっています。

危機管理の言葉にハインリッヒの法則というのがある、1つの重大な事故の背景には29の軽微な事故があり、29の軽微な事故の背景には300の事故未遂（ヒヤリハット）があると言われて

います。
重大な事件・事故につながらないうちに「自分はどう周囲に映っているのか」「自分の行為はこの先どうつながっていくのか」ちょっと立ち止まって想像するクセをつけてください。

【当面の主な予定（6月後半）】

15日（木）耳鼻科検診
16日（金）内科検診・SC来校
20日（火）性教育講演会
21日（水）心臓2次検診
22日（木）期末考査（27日まで）